

巻上公一

超歌唱家 voice performer

Rock band HIKASHU... (pataphysical songs and impro)

ヒカシューのリーダー

静岡県熱海市生まれ、在住。日本を代表する国際的ヴォーカリスト。1978年結成のヒカシューのリーダーとして作詩作曲はもちろん、声の音響やテルミン、口琴を使ったソロワークやコラボレーションも精力的に行っている。声の即興は、立体派、ダダ、フリーの系譜を継ぐ宇宙派と言える。音階的スキヤット(JAZZ)、文学的ハナモゲラ(ナンセンス)や、娯楽的楽器の模倣(human beat box)ではなく、より抽象的な世界だ。またトゥバ共和国の喉歌ホーメイは日本の第一人者として多くの歌手を育てているばかりでなく、1997年から毎年トゥバやアルタイから名歌手を招聘、国際交流を組織している。(*モンゴルでは喉歌はホーミーと呼ばれている。)テルミンは空中に手かざしをするロシアの電子楽器だが、通常の奏法を逸脱したカンフースタイルを確立している。口琴はローベルト ザグレッチーノフを師とし、たくさんの発明口琴を使いこなす。1998年に作演出した口琴オペラによって口琴ブームの火付け役となった。ヒカシューはもう30年近くも続くニューウェイブを根とするクリエイティブな異色のロックグループだ。歌らしい歌から歌にもならないものまで歌う歌唱力には定評がある。それらの音楽要素を駆使する演劇パフォーマンス(チャクルパシリーズ)のクリエイターとしても活躍している。また、世界のさまざまフェスティバルにも招聘されている。

イギリスのカンパニーウィーク 1994、トゥバ国際ホーメイフェスティバル 1995 1998 2003
ドイツの「震える舌」フェスティバル 1999、スイスのタクトロスフェスティバル 1996 1999、
モスクワ「丸呑み或いは危険な声帯」フェスティバル 2000

オーストラリアの What is music フェスティバル 2001、

オーストラリアのインスブルク音楽祭 2002、

カナダの Victo 2003 アルタイ共和国エルオユン 2002、カイフェスティバル 2004

カルムキア語り部フェスティバル 2005 ノルウェイのウルティマ現代音楽祭 2005、

ニュージーランドの ASIA-PACIFIC FESTIVAL 2007、など多数。

歌のアルバムに『民族の祭典』(東芝 EMI) 『殺しのブルース』(東芝 EMI) ソロヴォイスに
『KUCHINOHHA』(tzadik) 『KOEDARAKE』(tzadik) 口琴 『ELECTRIC EEL』(tzadik) テルミン 『月
下のエーテル』(doubt music)

川上未映子(かわかみ・みえこ)

1976年8月29日大阪府生まれ。『夢みる機械』(2004年)、『頭の中と世界の結婚』
(2005年)などのアルバムをビクターエンタテインメントより発表。2006年随筆
集『そら頭はでかいです、世界がすこんと入ります』をヒヨコ舎より刊行。2007年
初めての中編小説「わたくし率 イン 歯一、または世界」が第137回芥川賞候補となる。

同年第1回坪内逍遥賞 奨励賞を受賞。2008年「乳と卵」が第138回芥川賞を受賞。第1回池田晶子賞を受賞。ほかの作品に、「先端で、さすわ さされるわ そらええわ」(青土社)がある。

清水一登

作編曲と共に、キーボード、マリンバ、クラリネットなどいろいろな楽器を演奏。'84年「チャクラ」に参加、「キリングタイム」「はにわちゃん」等を経て、'89年、れいちと「AREPOS」結成。「お U」と並行して活動続ける。映画「トキワ荘の青春」「ざわざわ下北沢」、舞台「ネネム」「プレヒトオペラ」、CM等の音楽、多くのサポートやセッション、また「ヒカシュー」や「オパビニア」等のバンド活動も行っている。

坂本弘道

エフェクター類を駆使し、果てはグラインダーでチェロから火花を散らすパフォーマンスまで、変幻自在な音作りで内外のシーンで活動するチェロ奏者。ノコギリの名手でもある。80年代後半より数々のユニットに名を連ねてきた。現在は、遠藤ミチロウ、石塚俊明との「ノータリズ」、「パスカルズ」、「echo-U-nite」、「渋さ知らズ」、「ASA-CHANG&ブルーハッツ」などに参加。一方、90年代中盤よりインプロヴァイザーとしてのセッションを精力的に重ねている。過去の共演者は、梅津和時、勝井祐二、灰野敬二、Haco、巻上公一、大友良英、ヒグマ春男(映像)、岩下徹(舞踏)等々枚挙にいとなし。UA、川上未映子、原マスミ、白崎映美、酒井俊、滝本晃司、鈴木祥子、あがた森魚、友川かずき等、歌い手との共演も多い。ダンスカンパニー「枇杷系」、「うずめ劇場」、Q-con(絵)、かわなかのぶひろ(映画)、「野戦の月・海筆子」など、他ジャンルとの交流も多彩、昨年は tsumazuki no ishi 公演「犬目線」への楽曲提供、台湾映画「GOD MANDOG」、横浜未来演劇人シアター・野外ダンス公演「市電うどん」の音楽制作をてがげた。99年にソロアルバム「零式」を発表。

山本達久

1982年生。純アコースティック非エレクトリックドラマー。2003年、一楽儀光(ドラびでお)とのツインドラムハードスカムコアバンド「香港男祭」で RUINS、ガロリンズと共に韓国 Tour を敢行。賞賛と叱責を同時に浴びる。時期を同じく、佐々木匡士 duo、倉地久美夫 trio(菊地成孔 sax)など、唯一無二の歌い手との共演を重ねる。その時期から、内橋和久、知久寿焼(ex たま)、灰野敬二などなど数々のミュージシャンと多数セッションを敢行。同時に Zu(ITA)、LightningBolt(US)、triosk(AUS)、HansReichel(GEL)、GianniGebbia(ITA)、RogerTurner(UK)など、来日アーティストの Tour サポート、他多数にわたるイベントのオーガナイズも山口 bar 印度洋でこなす。現在は、石橋英子(PANICSMILE、NATSUMEN 他)との duo や、ナスノミツル、井上経康との trio「zggzag!!!」、他、自身のセッションユニット「tanta」や、el-malo のレコーディング等、数々のプロジェクトに参加、企画し、都内を

中心に活動。

[http:// free-a rchive .main. jp/tya mamoto .html](http://free-archive.main.jp/tya_mamoto.html)

ヒカシュー

1978年に結成。リズムボックスとメロトロンを使ったバックグラウンドに、地下演劇的な内容と軽快で色彩感ある歌声を加味した音楽で、スタート。1979年にニューウェイブ、テクノポップの草分けとして東芝 EMI の洋楽からシングル「20世紀の終りに」でデビュー。結成当初から現代音楽、ジャズ、伝統音楽、民族音楽、カートゥーンミュージックなど、様々なジャンルを取り込みながら、鋭く世界を抉る、アイロニーと可笑しみに満ちた「ヒカシュー的世界」は一貫している。その後、メンバーを変えながらも、即興とソングが共存する方法論で、輝ける例外を作り出すパタフィジック(形而超学)な作品とステージをつくり続けている。そのライブは、陶酔と覚醒 のアンビバレンツ。究極のノンジャンル。技術に支えられた飄々としたユーモラスなステージで知られている。最新作は CD 『生きること』 mkr-0004。

メンバーは、

巻上公一(vocal theremin koukin cornet)

三田超人(guitar sampler)

坂出雅海(bass)

清水一登(piano synthesizer bass-clarinet)

佐藤正治(drums percussion koukin)

坂田明 (さかた・あきら) (アルトサクソフーン、クラリネット、時々うた)

1969年、『細胞分裂』を結成、1972年、山下洋輔トリオに参加、1979年末まで在籍する。1980年、自己のトリオを結成、以来、様々なグループの結成、解体を繰り返しながら音楽シーンの最前線を目指す。現在のレギュラー・ユニットは「坂田明・mii」, 「YOSHII」そして「Yahoo!」。同時に、内外のミュージシャンとの交流も活発で、2005年春には、ジム・オルークとの共同プロジェクトをスタート、『テトロドトキシソ』(2005年)、『explosion』(2006年)などを制作、最新作はジム・オルーク、Yoshimio とのライブを記録した「八行」(2008年2月発表)。また、日本チェルノブイリ連帯基金のために作った CD 「ひまわり」(2006年)、「おむすび」(2008年)の二作も話題を集めている。<http://www.warabi.ne.jp/~daphnia-pulex/>

2008年5月現在

Skist

1999年結成。それまで様々な形でニューヨークと東京のエクスペリメンタル・シーンで活動していたサム・ベネット(プログラミング、ドラム、パーカッション、Wavedrum、シンセサイザー)といとうはるな(ボーカル、プログラミング、フィードバック・ノイズ、フ

ィールド・レコーディング)の二人による実験・歌ものユニット。ポップソングの新鮮なあり方を追求し、プログラミングや電子音を基盤としながら、声とパーカッション、歌のリズムで多彩で有機的な音言語を創り出している。IDMやトリップホップ、そしてグリッチ系、音響系の特徴をシェアしつつ、元々はファンク・ドラマーであり、アフリカン・ドラムを修行したベネットの洗練されたポリリズムと、はるなの言葉世界と透き通った歌声はSKISTサウンドを他にない独自のものにしている。

2000年にはミニアルバムを2枚発表、その後 Mille Plateaux、FatCat、Luaka Bop など欧米の先鋭的レーベルのコンピレーションにトラックを提供した後、2002年にファースト ELLIPSIS(イリプシス)を自身のPolarity Recordsレーベルよりリリース。そして4年のブランクを経て2006年にニューアルバムTAKING SOMETHING SOMEWHEREを発表。現在のライブ・サウンドは生パーカッションや小物を全面的にフィーチャーし、歌により重きを置いたものになっている。

「さりげなく DiVa」

出演 高瀬"makoring"麻里子 (vo)
谷川賢作 (pf)
ゲスト 鬼怒無月 (gt)

DiVa(ディーヴァ)は、1995年、高瀬麻里子(Vo)、谷川賢作(Pf)、大坪寛彦(B)によって結成された、「現代詩をうたう」バンドです。谷川俊太郎作品を中心に、まどみちお、片岡直子、そして中原中也、萩原朔太郎など、日本を代表する詩人たちの100編ちかい作品を、既存のジャンルにとらわれないピュアでストレートなサウンドで表現。その個性的な楽曲は結成当初から注目を集め、矢野顕子はじめ多数のアーティストによってカバーされています。インディーズ・レーベルから1stアルバム「なあに」をリリース後、日本コロムビアからメジャー・デビュー。2枚のアルバムとシングルを発表したほか、詩人の谷川俊太郎とともに「朗読と音楽のライブ」を国内外で活発に行うも、2002年1月、突然の活動休止。その後、ソロやユニットでの活動などをとおして、それぞれの世界を豊かにふくらませてきた3人が、2007年4月1日、5年ぶりのライブ「はるのゆめ」で再集結。2008年2月アルバム「うたっていいですか」(TRBR-0012)をリリース。本日はベースの大坪寛彦に代わり、DiVaを結成当初からサポートしてきたギターの鬼怒無月の参加でお送りします。

高瀬"makoring"麻里子(ヴォーカル)

95年結成の現代詩を歌うユニット"DiVa"のvocal。日本コロムビアよりアルバム[そらをとぶ][ラブライター]を発表。04, 珍癒し型ハモリ女子3歌楽坊 "トランスパランス"を結成。テクニックを遊び心に生かしたコーラスワークが注目されている。精力的なソロ活動は、共演者により変わる世界観が好評。自主制作CD『まこりん demo どうぞ』はユニークなプロデュースが楽しい。他、声優業など、その活動は多岐に渡る。谷川俊太郎をして「まこりん

の歌で聴くと、詩が活字で読むよりもずっと深く心に届くのに驚く」と言わしめた、日本語の美しさに定評あるヴォーカリスト。 公式 HP <http://www.makoring.com>

谷川賢作 (たにかわ けんさく 作/編曲 ピアノ)

1960年東京生まれ。ジャズピアノを佐藤允彦に師事。演奏家として、現代詩をうたうバンド「DiVa」ハーモニカ奏者続木力とのユニット「パリヤーソ」、また父である詩人の谷川俊太郎と朗読と音楽のコンサートを全国各地で開催。80年代半ばより作・編曲の仕事をはじめ、映画「四十七人の刺客」「竜馬の妻とその夫と愛人」NHK「その時歴史が動いた」テーマ曲等。88、95、97年に日本アカデミー賞優秀音楽賞受賞。近年では、06年びわ湖ホール制作「雷の落ちない村」の音楽監督。ピアニスト館野泉に組曲「スケッチ・オブ・ジャズ」を献上。画家、山本容子の絵とエッセイで綴る「Jazzing」の音楽プロデュース等。映画音楽担当最新作は「那須少年記」DiVa最新CD「うたっていいですか」(TRBR-0012)

谷川賢作オフィシャルサイト <http://www.taniken.net/>

鬼怒無月(g)

'64年神奈川県出身。高校時代より音楽活動始める。'90年に自己のグループ、ボンデーフルーツを結成、'94年にバイオリン奏者勝井祐二と共に発足したレーベル「まぼろしの世界」より現在までに最新作の「Bondagefruit6」(05年2月発売)を含む6枚のアルバムを発表。ボンデーフルーツは'98年"Scandinavian Progressive Rock Festival"、'99年にはサンフランシスコの"Prog Fest '99"に招かれる。また2004に結成したコンテンツポラリータンゴバンド "Salle Gaveau"でも RIO Festival2007, Mosaic Music Festival in Singapore 等に出演するなど海外での活動も盛んである。。また EWE より3枚のアルバムをリリースしているチェンバーロックバンド, Ware house, ギターミュージックの極を追求する Coil、そして Coil 解散後新たに ナスノミツル、中山努、外山明と結成した "BadKnoid" 勝井祐二との Pere_Furu、クラシックギタリスト鈴木大介とのコラボレーション、"The Duo"、壺井彰久との ERA、吉田達也の是巨人、カルメンマキのサラマンドラ、更に灰野敬二、常味裕司とのコラボレーション、ギターソロ等 日々自己のギタースタイルを進化させ続ける異才ギタリスト。

山川冬樹

ホームメイ歌手/アーティスト。1973年、ロンドンに生まれる。自らの「声」と「身体」をプラットフォームに、音楽、舞台芸術、美術の境界線をまたにかけた脱領域的活動を展開。身体内部で起きている微細な活動や物理的現象を医療機器などのテクノロジーによって拡張、表出する。電子聴診器を用いたパフォーマンスでは心音を重低音で増幅し、さらに心臓の鼓動の速度や強さを意図的に制御(時に停止させながら) そのリズムを光の明滅として視覚化。己を音と光として空間に還元することで、観客との間の境界線を消滅させてみ

せる。また、骨伝導マイクを使った頭蓋骨と歯とハミングによるパーカッシブなパフォーマンスは、ソニーウォークマンのコマーシャルで取り上げられ話題を呼んだ。活動の範囲は国内にとどまらず国際的に展開。2007年、ベネチア・ビエンナーレ・コンテンポラリーダンスフェスティバルから前年に引き続き二回連続で招聘を受け、同年秋に行った米国ツアーは各地で公演がソールドアウト。大きな反響を呼ぶ。歌い手としては、2003年ロシア連邦トゥバ共和国で開催された「ユネスコ主催 第4回国際ホームイフェスティバル」に参加。コンテストでは「アヴァンギャルド賞」を受賞。その独自のスタイルは、現地の人々に「
(アヴァンギャルド・ホームイ)」と称される。同年東京で開催された「第2回日本ホームイコンテスト」では、第1回大会(2001年)に引き続きグランプリと観客賞をダブル受賞。2004年よりシタール奏者ヨシダダイキチが結成したバンド「AlayaVijana」に参加。バンドのフロントマンをつとめ、フジロックフェスティバルをはじめ多くのフェスティバルに出演、2枚のアルバムを発表。一方で美術作家としてインスタレーション作品を制作。2008年9月、釜山ビエンナーレへの出展が発表が決まっている。現在、東京藝術大学非常勤講師。

藤原清登

高松市に生まれる。音楽家の両親のもと、16歳でベースを始め、東京藝術大学音楽部教授、故今村清一氏に師事。1974年に渡米。パークリー音楽院を経てジュリアード音楽院卒業。同院にてニューヨークフィル首席コントラバス奏者ジョン・シェイファー氏に就いて学ぶ。21歳、ホレスシルバークインテットにて米国デビュー、ツアーに参加。同年に米レーベル Muse, 及び Strata East にクリフォードジョーダン、シャミークファラのアルバムでレコーディングデビューする。ホレス・シルバークインテットをはじめ、ジャッキー・マックリーン、クリフォード・ジョーダン、ラシッド・アリ、サム・リバーズ、ジョー・リー・ウィルソン、ウディー・ショウ、ジャッキー・パイヤードなど多数、ジュリアードオーケストラの一員としてヨーロッパツアーにも参加。また他分野の進歩的な芸術家と多数共演。N.Y.のヴィレッジゲート、スイートベイジル、ブルーノート、ムジカオツジ(イタリア)、イントーンフェスティバル(オーストリア)など出演。ジャズ、クラシックの垣根を越えた幅広いジャンルで活躍。1985年自己のグループ(ケニー・ギャレット、トーマス・チェイピン等を含む)結成以来現在までリーダーアルバム14枚発表。その他参加アルバム多数。近年日本でもCDリリース、コンサート活動もめざましく、2000年スイングジャーナル誌ではベース部門で第1位に選ばれている。
<http://www.kiyotoclub.com/jap/index.html>

吉田寛望 (Trumpet)

長崎県佐世保市出身。1988年3月29日生まれ。9歳の時、小学校のジャズバンドに入部しトランペットを始める。13歳の時、渡辺貞夫氏と共演。2006年、洗足音楽大学ジャズコ

ースに入学、原朋直氏に師事。現在在学中。

寺井雄一 (Ten.Sax)

1986年4月30日東京都生まれ。高校生の頃サックスとジャズを始める。現在洗足学園在学。サックスをボブザングに、音楽論を原朋直に師事。

鹿野亮介 (Alt.Sax.)

1987年9月30日生まれ。地元仙台にて一戸裕三朗氏に師事。尚美学園大学音楽表現学科 jazz コースに全額免除特待生で入学。サックスを三木俊雄氏に師事した。現在は渡米準備のため大学を中退し、池田篤氏に師事している。2008年9月にシカゴへ留学予定。

宮本道隆 (Alt.Sax., Flute)

1987年5月28日福岡県福岡市生まれ。12歳の時に地元小学校のブラスバンド同好会に入り、アルトサックスに出会う。以後、中学・高校で吹奏学部にてクラシックを中心に、吹奏楽曲やポップスに親しむ。高校のマーチング全国大会で演奏したパット・メセニーの曲をきっかけに、ジャズに関心を示す。現在洗足学園音楽大学ジャズコースに在学、Bob Zang に師事。ジャズおよびポップス系のバックアップグループでも活動中。

小西遼 (Alt.Sax.)

1988年東京都生まれ。中学よりピアノとサックスを始める。吹奏楽で指揮やクラシック等のアンサンブルを中心に学び、高校よりセッションやレッスンを受け始める。宮本大路氏、ボブザング氏に奏法を師事。ジャズに留まらず多岐に渡るジャンルの演奏に全力を注ぎながら、洗足音大にて日々精進を努める。

久保島直樹 (Piano)

1955年山梨県甲府市生まれ、国立音楽大学卒業、ピアノを坂本輝、佐藤允彦両氏に師事する、その後早坂紗知&stirup、吉田哲治 group 藤川義明 group、林栄一 band を経て、現在は旧橋壮5や自己の group で、新宿[pitinn]や西荻窪[アケタの店]などで演奏している。1996年自主制作[THE DAWN]を発表している

津田馨太 (Drums)

1986年北海道函館生まれ。国内外の著名なジャズミュージシャンとの共演、沢田亜矢子など芸能人のサポート、クラブシーンで活躍するバンド「tough&cool」、そして自己のジャズトリオ等、幅広く活動中。

CICALA-MVTA (シカラムータ)

アバンギャルドとチンドンのストリート魂が絶妙にシェイクされた大熊ワタルのクラリネットに、サクソ、ヴァイオリン、ギター、トロンボーン、チューバ、ドラムが刺激的かつ絶妙に絡む。ロック、ジャズ、トラッド...あらゆるジャンルの垣根は完璧に踏みにじられ、シカラムータの破壊/再生のメリーゴーラウンドに乗って、すべては爆笑と号泣の渦に巻き込まれていく。「東京アンダーグラウンドの底力」と言われた曲者揃いの超異才集団による脳天直撃サウンドは、国内外で常に反響を呼び続けている。1994年頃より、クラリネット奏者大熊ワタルがリーダーとなり活動を始めた「大熊亘ユニット」を、97年あたりに「CICALA-MVTA (シカラムータ)」と命名、戦前の大道演歌師・添田唾蟬坊の墓碑銘(下記)にちなんでいる。

「A CICALA-MVTA CHE CANTAVA ELAS VA MOGLIE CHE L'AMAVA」

(= 「歌を歌った声なき蟬と彼を愛したその妻に」の「声なき蟬」)

1998年、初アルバム『シカラムータ』を発表。

1999年、ヨーロッパでのCD配給開始。

2000年、夏のヨーロッパ8ヶ国20数ヶ所にわたるツアーで反響を呼ぶ。

2001年、2ndアルバム『凸凹 (dekoboko)』発表。

2002年、再びヨーロッパのフェスティバル巡業。

2004年、3rdアルバム『GHOST CIRCUS』発表。

2006年、公式ライブ盤、4枚目のアルバムとなる『生蟬 namazemi』発表。

台北市主催「Taipei Art Festival」に出演、2日間の単独公演。

2007年、ウィーン市「イマジナリー・バルカン」フェスティバルに招待されメインアクト。

ロンドン市長のテムズ・フェスティバル出演。

シカラムータなどに着想を得た小説「mit tuba」(瀬川深)が太宰治賞受賞。

また、TBS「NEWS23」、NHK-FM「セッション505」、英BBCラジオ、独ZDFなど、放送出演も多数。

【主な出演コンサート】

ウィーン市「イマジナリー・バルカン」フェスティバル(2007)

ロンドン市長主催テムズ・フェスティバル

台北市「Taipei Art Festival」(2006)

嘉義県(台湾)アジア音楽祭(2004)

FUJI ROCK FESTIVAL'03(2003)

デンマーク、Roskilde Festival(2002)

アムステルダム、Roots Festival(2002)

ロンドン・バービカンセンター、Urbanbeat Festival(2001)

ドイツ・ルドルシュタット、Tanz&Folk Festival(2000)

ロンドン・ロイヤルフェスティバルホール、BLURのオープニングアクト(2000)

Paul FISHERによるライブ・レポート(英語)

横浜寿町フリーコンサート(1999/2000)

”楽隊”の行進のあとについていく少年に、私をもどしてくれました。大熊さんのクラリネットにしばれています。(小沢昭一/俳優)

ブレーキのとれたヤポネシアン・トラッド。ユーラシアを迷走する、月夜の為のユニゾン放屁か、はたまた吹奏か。ベスト・コンポにシカラムータを。さあ、アイラー達を呼べ。俺も三線を持って行こう。(中川 敬/ SOUL FLOWER UNION)

大熊ワタルにとって、おそらくすべてはヂンタなのだ。バルカン・ヂンタ、バルトーク・ヂンタ……そしてアヴァン・ヂンタ。真の独創性は思いがけないところからやってくる。(平井 玄/音楽評論家)

これを聴かずして、日本のジャズを云々するのはあまりにも不毛だ。(スイング・ジャーナル誌 佐藤英輔)

深町純

1971年のデビュー以来、独自の音楽観と確かな音楽センス、巧みなテクニックに支えられ、日本の音楽シーンを担ってきた。アーティストのアルバム制作のみならず、ミュージカル、ドラマ、映画、CMの音楽制作まで幅広く活動。最近では小柳ゆき、Baby Booなど若手アーティストのサポートを行う。

商業的音楽活動の一方、「自分の作りたい音楽」へアプローチするため、自身のアルバム制作、バンド活動も精力的に行う。75年結成の「深町 純&21st センチュリーバンド」(大村憲司、村上ポンタ秀一、小原礼)をはじめとして、さまざまなミュージシャンとセッション。なかでも80年結成の「KEEP」(和田アキラ、山木秀夫、富倉安生)は、その衝撃的な音作りで日本のフュージョンシーンに一石を投じた。70年代後半には、スティーブ・ガッドやブレッカーブラザーズ、マイク・マイニエリなど、ニューヨークのスタジオミュージシャン達と交流を深め、幾つかのオリジナルアルバムを制作。代表作として「On The Move」がある。この時期、彼らを日本に招き、ライブ公演を開催。アルバム「深町 純&ニューヨークオールスターズ/ライブ」は2002年に再発され、年月を経ても新鮮な音楽として、今なお受け入れられている。

SALLE GAVEAU

鬼怒無月をリーダーとして、タンゴのリズムを援用しつつ、ピアソラの遙か彼方を目指す音楽を奏でる五重奏団。楽曲の斬新性、演奏技術の高さ、即興対応能力、など全てが類い希。新しい音楽を聴きたい全ての人に聴いて欲しいグループです。

メンバー

-鬼怒無月(g) <http://mabo-kido.hp.infoseek.co.jp/>

-喜多直毅(vln) <http://www.naokikita.net/>

-佐藤芳明(acc) http://www.geocities.jp/acc_sssaaatttoo/

-鳥越啓介(contrabass) <http://chousuke.net/>

-林正樹(pf) <http://www.c-a-s-net.co.jp/masaki/>

幅広い活動により、様々な音楽シーンに接している鬼怒無月が、「新しい音楽の可能性」を説いて集めたメンバーは、各々独自のフィールドでの活動で知られた名手達であり、全員がリーダーバンドを率いて第一線で活躍している精鋭。鬼怒無月自身は、Bondage Fruit, Warehouse, Coil, Era を率いての縦横無尽な活動で名高いギタリスト。喜多直毅は、タンゴの本場アルゼンチンでの活動中に高い評価を得、帰国後はタンゴバンドを率いているヴァイオリニスト。従来のアコーディオンの枠を超える奏法を披露する佐藤芳明は、変拍子 Jazz の名手。コントラバス奏者である鳥越啓介は、伝説的な Jam Band "PHAT"での活躍が知られている。Jazz や Jam Band などでの驚異的な演奏能力で知られる林正樹は、天才の名にふさわしい逸材。2003年結成。2007年1月、ファーストアルバム「Alloy」を発表。2007年4月、"Rock In Opposition 2007 France Event" (France)に Magma, Faust らと共に出演。2008年にはシンガポールのモザイクミュージックフェスティバルに出演等海外での活動も盛んである。

鬼怒無月(g)

'64年神奈川県出身。高校時代より音楽活動を始め。'90年に自己のグループ、ボンデーフルーツを結成、'94年にバイオリン奏者勝井祐二と共に発足したレーベル「まぼろしの世界」より現在までに最新作の「Bondagefruit6」(05年2月発売)を含む6枚のアルバムを発表。ボンデーフルーツは'98年"Scandinavian Progressive Rock Festival"、'99年にはサンフランシスコの"Prog Fest '99"に招かれるなど海外での評価も高い。ボンデーフルーツと平行して EWE より2枚のアルバムをリリースしているチェンバーロックバンド、Ware house, ギターインストルメンタルの極を追求する Coil、勝井祐二とのデュオ、Pere_Furu、壺井彰久との ERA、吉田達也の是巨人、カルメンマキのサラマンドラ、更に灰野敬二、常味祐司とのコラボレーション、ギターソロ等 日々自己のギタースタイルを進化させ続ける異才ギタリスト。

喜多直毅 Kita Naoki

72年岩手県盛岡市出身。国立音楽大学在学中からポピュラーソロヴァイオリニストとして活動。同学卒業後は英国の Liverpool Institute For Performing Arts に3年間留学。99年7月より、アルゼンチンのブエノスアイレスに滞在。アストール・ピアソラの重要なパートナーであり、タンゴヴァイオリンの最高峰フェルナンド・スアレス・パス氏に師事。ブエノスアイレス市内の劇場、タンゴクラブにも数多く出演、好評を博す。帰国後に自身のタンゴバンド"喜多直毅と TheTangophobics"を結成。以後同バンドのリーダー、アレンジャーとして六本木スイートベイジル 139 等で定期的にライブを行なう他、04年春バンドネオンの小松亮太氏のコンサートツアーに参加。アレンジも提供。05年2月~3月には小松

亮太氏の南米4カ国ツアーにも参加し各国で絶賛を浴びた。他にも多くのアーティストのアルバムや、TVコマーシャル音楽の録音に携わっている。

佐藤芳明

国立音楽大学在学中に独学でアコーディオンを始める。1995年～96年、パリのC.I.M.Ecole de Jazzに留学、アコーディオニスト・Daniel Milleに師事。ライブ、レコーディング、舞台音楽など、様々な現場で数多くの仕事をこなす一方、「ガレージシャンソンショー」では2枚のアルバムをキングレコードよりリリース、また「森山威男クインテット」にレギュラーメンバーとして参加するなど、ジャンルを越えた幅広い活動を展開。また自己のトリオ「Pot Heads」では2006年6月に1stアルバム『ゆげ』を発表。今までのアコーディオンのイメージにとらわれない独自のサウンドを目指す。

林正樹

1978年12月東京生まれ。5才よりピアノを始め、中学入学後ポピュラー音楽に目覚め、独学で音楽理論の勉強を始める。その後、佐藤允彦、大徳俊幸、国府弘子らに師事し、ピアノ、作曲、編曲などを学ぶ。97年12月に、民謡歌手の伊藤多喜雄のバンドで南米ツアー、国内ツアーに参加し、プロ活動を始める。以後、自己のユニットである「宴」「Kokopelli」「アルカイック」「クアトロシエントス」「West/Rock/Woods」「Stewmahn」「SU」「シャバヒゲ」での活動の他に「小松亮太&ザ・タンギスツ」、中西俊博、エリック宮城ビッグバンド、「Salle Gaveau」、海老沢一博、横山達治、中島啓江をはじめ、数多くのアーティストと共演。リーダー及び参加アルバムも多数あり、自己のユニットで聴かれるその作曲、編曲能力は各界で高く評価されている。2006年6月に、スウェーデンで録音を行った「Kokopelli」の1stアルバム、そして2008年4月にソロピアノアルバム「Flight for the 21st」をリリース。

鳥越啓介

1975年 岡山県玉野市出身。高校時代、吹奏楽部に入部しコントラバスを弾き始める。高校卒業後、社会人の傍ら地元のビッグバンドなどで活動。96年脱サラ、97年上京。99年、PHATのメンバーとなり、2001年、東芝EMI Blue Note レーベルよりメジャーデビュー。シングル1枚、アルバム2枚を残し、2003年3月、渋谷クラブクアトロでのワンマンライブを最後に解散。その後、ジャズ、邦楽、ポップスなど様々なセッション、レコーディングに参加。2004年、木住野佳子にて、バリ島ジャズフェスティバル、韓国公演、Blue Note 全国ツアーに参加。現在、木住野佳子、マリーン、coba、Jazztronik、天野清継 silent jazz trio、Oh! Key Boys (鳥山雄司、神保 彰、和泉宏隆)、佐藤芳明、太田剣、大槻カルタ英宣セッション、秋田慎治、小沼ようすけ、トミーキャンベル、横山達治ラテンバンド、朱鷺たたら(田楽笛、篠笛、能管奏者) Asa Festoon、akiko、Dorlis ほか、自らのバンドのライ

ブも展開中。

sim

大島輝之 guitar

大谷能生 electronics synthesizer

植村昌弘 drums

音と音の関係(すきま、ずれ、ゆらぎ等)をキーワードに、ギタリスト大島輝之の呼びかけで結成。大島の緊密な作曲によるバンド・アンサンブルの新天地を目指しつつ、ライブでは強烈な音圧と個々の演奏のダイナミズムが結びついたプレイを繰り広げる。2005年、1st アルバム「sim」(WEATHER/HEADZ)を、2006年にはvo 佳村萌との2nd アルバム「common difference」(MIDI Creative)を発表している。

大島輝之 (guitarist, composer)

リーダーユニットとして 2003年 feep「the great curve」(mao)、2005年 sim「sim」(WEATHER/HEADZ)、2006年 sim featuring kaumura moe「common difference」(Midi Creative)をリリース。2006年12月、初のソロアルバム「into the black」(body electric/ewe)をリリース。ギタリストとしては、エフェクターを駆使した演奏で、国内外のインプロヴァイザーと数多く共演している。 <http://hello.ap.teacup.com/ohshima-sim/>

大谷能生 (computer, key)

1972年生まれ。批評家、音楽家。96年?02年まで音楽批評誌「Espresso」を編集・執筆。様々な雑誌、webへの執筆・寄稿を行い日本のインディペンデントな音楽シーンに深く関わる。2004年9月、菊地成孔との共著『憂鬱と官能を教えた学校【パークリー・メソッド】』によって俯瞰される20世紀商業音楽史(河出書房新社刊)を上梓。2004、2005年と同氏と共に東京大学教養学部にて講義を担当。『東京大学のアルバート・アイラー 歴史編』『同キーワード編』(菊地成孔・大谷能生/メディア総合研究所)として書籍化される。他に、『日本の電子音楽』(川崎弘二著 大谷能生協力/愛育社)、『200CD ジャズ入門 200 音楽書シリーズ』(200CD ジャズ入門編纂委員会編/学習研究社刊)等。2007年9月に月曜社から初の単独批評単行本『貧しい音楽』刊行予定。音楽家としては、sim、masなど多くのグループに参加。2006年12月にはソロ・アルバム『「河岸忘日抄」より』(原作:堀江敏幸)をHEADZからリリース。その他さまざまなセッションで演奏を行っている。2007年には待望の第一批評集『貧しい音楽』(月曜社)を上梓。

植村昌弘(drums)

1989年前後からドラマーとしての活動を開始。「P.O.N.」「GROUND ZERO」「渋さしらズ」「NOVO-TONO」他数々のユニットに参加し、現在は自己のリーダーユニット「MUMU」の他

「LOVEJOY」, 「sim」, 「circuit unconnection」等数多くのユニットに参加している。2008年、MUMUの1stアルバム「2005」をまぼろしの世界よりリリース。

John Zorn's Cobra Tokyo Sengawa operation 林正樹部隊

吉見征樹

1984年 タブラを始める。1985年 幅広い音楽修行の為にニューヨークに渡る。1987年よりインドはムンバイにてタブラの大御所ウスタッド・アラ・ラカ・カーン氏と、その息子ウスタッド・ザキール・フセイン氏に師事。タブラの可能性を追求する為、インド古典音楽はもとより、あらゆるジャンルの音楽家・ダンサー・アーティストなどとの共演、ミュージカル、ファッションショー、演劇などの音楽を手掛け、またTV・ラジオのCM、テーマ曲、映画、CD等のスタジオ録音など数多く携わっており、国内外を問わず精力的にセッションを続けている。インプロヴィゼーションを得意とし、どのようなセッションにおいても自在に絡みつくその演奏は太鼓でありながらもメロディアスであり、タブラであるあらゆるジャンルとの共演をこなす貴重な存在である。

蜂谷真紀

(はちやまき・Maki Hachiya・6月6日生まれ・双子座・B型)

ボーカリスト、ボイスアーティスト、シンガーソングライター、ピアノ弾き語り
心に描かれるままに「声」で空飛び「歌」で絵を描く歌い手。即興、JAZZ、オリジナル、弾き語り、VOICE SOLO、コラボレーション、日本語曲、共演者オリジナル、無国籍...JAZZをルーツに持ちながらも、国内外の奏者とジャンルレスに「ライブ」を重ねている。CLASSIC PIANOを井伊宏氏に師事。JAZZ PIANOを元岡一英氏に師事。その後、加藤崇之g、古澤良治郎dr、両氏によってライブシーンへ。ライブ以外では、三池崇史監督の映画8作品をはじめ、映画、テレビ、ラジオ番組の主題歌など、多数録音させて頂いている。また自作曲は、大原美術館所蔵絵画への組曲、富永昌敬監督の映画作品、TV番組などに起用されている。(追記；ただの音楽バカだと思います)

大多和 正樹 (おおたわ・まさき)

日本伝統楽器「和太鼓」を世界での普遍的な演奏ツールにするべく、様々な芸術とのコラボレーションを展開。中でも、歌心と呼吸に最も重きを置くソロパフォーマンスからはメロディが聴こえてくるとの評判が高い。01年より自身の構成・演出によるコンサート『ゆめみいし』を5回開催。三宅裕司主宰「劇団S.E.T.」公演、つくく プロデュース「後藤真希コンサート」ツアー、台湾「国際台北打楽器サマーキャンプ」にて招聘講師を務める。NY・ルーマニア・ローマ・パリ・モスクワ等海外公演も多数。99年、富士山太鼓祭り「大太鼓一人打ちコンテスト」最優秀賞。05年、千葉市芸術文化新人賞受賞。

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~tawa/index.htm>

田中邦和

1966 年生まれ。大学時代からジャズ、ポップスに傾倒し、以来サックスを独学にて修める。「幅広い音楽を俯瞰する」と評されるスタイルで、あらゆるサウンドに溶け込みつつオリジナルな存在感を醸し出す。「sembello (スカパラ沖との双頭バンド)」「東京中低域 (バリトンサックス 1 1 人のアンサンブル)」「blackvelvets (ムード音楽の現代における最解釈)」「田中邦和 jazz trio」などでの活動の他、レコーディング、セッション等多数。New York、London、Monterey ほか内外のフェスティバルにも出演。さらに活動のフィールドを広げている。www.kuni-kuni.net

CLUB JAZZ 屏風

CLUB JAZZ 屏風は「親密」な至近距離音楽を提供します。わずか数人しか聴けない神出鬼没のクラブです。

徳久ウィリアム

ブラジル出身。声の拡張と新たな可能性を目指すボイスパーフォーマー。元「倍音 S」。ホームメイなどの民族音楽的発声から、デス声、独自の「ノイズ声」まで、多様な声を操り、前衛からポップスまで、年間 100 本のライブを精力的にこなす。ワークショップやイベントディレクターもやってマス。

立岩潤三

ダルブッカを Susu Pampanin (S.F./USA) に師事、タブラ・バヤを吉見征樹 / Prafulla Athalye (MUNBAI/INDIA) に師事、ドラムを坂田稔氏に師事。Glen Velez (N.Y./USA) からフレムドラムのプライベートレッスンを受ける。GHOST、AlayaVijana、ポチャカイテマルコ、Rumi、Memories Of Nada、インド / アラブ / イラン古典音楽、雅楽 / 邦楽や各種ダンス / ファッション・ショー - とのコラボレーション等幅広いジャンルでドラム / パーカッションを担当し、日本に限らず U.S.A. やヨーロッパ各国、U.K / スコットランド、トルコ、香港、韓国等で演奏、ポダレスな活動を展開中。2005 年の愛知万博ではエジプト館で月に一度演奏を行ったり、2007 年にはバンド「GHOST」でトルコ / イスタンブールでの公演を行い喝采をあびる。またバハレン・ナショナル・デイやエジプト大使館イベント、各種トルコ関連イベント等でも演奏を行う。また DTM 書籍出版、海外 (インド / アラブ) 向けシンセサイザーのプロデュース、データ制作、アドバイザー、デモンストレーター等も手掛ける。現在ドラム / パーカッション講師として後進の育成にも力を入れている。【ホームページ : <http://members.jcom.home.ne.jp/tanc/>】

柳家小春（やなぎやこはる）

音曲師。東京都生まれ。粹曲・新内の名人である柳家紫朝に入門。端唄、俗曲、新内などの唄と三味線の弾き唄いで活動。また、イラストレーター〔イソノヨウコ〕としての顔も持ち、『東京人』などの雑誌や広告、書籍で幅広く活躍中。

永田一直

1969年生。電子音楽家、DJ、マスタリングエンジニア。DE DE MOUSE、CHERRYBOY FUNCTIONを輩出したテクノ・エレクトロレーベルExT Recordings主宰。自身もオールオーバージャンルなDJ、ORGANIZATION名義でのテクノ、ノイズを基調にした即興演奏、ハードコアテクノクラストバンドELEKTRO HUMANGELへの参加など様々なセッションを行う。

「ヤマねこさん」

「ヤマねこさん」は、トランペット山本ヤマとトロンボーン金子泰子（＝通称ねこさん）による金管デュオ。一粒の音の表情も愉快的な即興演奏、ふとした瞬間の想像を音にした個性的なオリジナル曲、大切に作りためた組曲 etc...たった二本の管楽器とは思えない深さと広がりのあるアンサンブルをお楽しみください。

山本ヤマ（trumpet）

未年うまれトランペッター。奏法を独学で習得し、ジャズ演奏家としてスタンダードから現代音楽と呼ばれるものまで、常に自問しながら取り組む。柔らかく温かい音の持ち主。作編曲家として、生み出した印象強い自作曲多数あり。音で絵を描くように、のびのびとしたメロディーラインを作りたい。バンドリーダーとして、個性の強いメンバーを率い、都内ライブハウスほか場所を選ばず活動中。07年、文化庁「学校への芸術家等派遣事業」に選ばれ大分県の小学校へ派遣される。演劇、映像作品、大道芸へ音楽を提供するなどの関わりや、異ジャンルとの共同作業に意欲を燃やす。

金子泰子（trombone）

千葉県出身。幼少より、緑の多い町で、動植物と戯れながら、レコードや楽器に親しみながら育つ。中学でフレンチホルンを始めたのが、管楽器との出会い。後に、ジャズを学びたいがためにトロンボーンに転向。クラシクトロンボーンを井口有里氏に、ジャズトロンボーンを向井滋春氏に師事。伸ばせば単なる一本の金属の筒になってしまう楽器ながら、演奏者の個性が非常に出やすいこの楽器に、はまる。ビッグバンドなどの大人数のバンドを経験するが、より少人数の、即興性の高い音楽に魅かれてゆく。様々なジャンルのセッションやライブに参加する機会を得た。現在は、作編曲をしたり、セッションの企画をしたり、即興を多く取り入れた音楽活動を行っている。屋外で演奏するのが好き。最近、野鳥の声に興味があり、ふと聴こえた声も、注意深く聴くといろいろ発見があり、楽しい。